

## 向こう岸へ渡ろう

マルコの福音書 4章 35-41 節

### はじめに

先週から四回に分けて、「信仰に生きる」というテーマで説教をしています。二回目の今日は、激しい突風の中で湖を舟で渡るイエス様と弟子たちの出来事から「信仰に生きる」ということを学んでいきたいと思います。

イエス様はある日、「**夕方になって**」、弟子たちに「**向こう岸へ渡ろう**」と言われました。イエス様は昼間、ガリラヤ湖のほとりで群衆にみことばを語っておられました。特にこの時は、多くのたとえ話を話しておられました。あまりにも群衆が多く集まったので、イエス様はガリラヤ湖の舟に乗って、そこで腰を下してみことばを語られました。群衆は、陸地からイエス様のみことばに耳を傾けていたのです。

夕方になったので、イエス様はみことばを語ることをやめられたのです。そして、群衆を陸地に残して、イエス様は舟に乗ったまま、弟子たちと一緒に「向こう岸へ渡ろう」と言われたのです。

### 1. 向こう岸へ渡ろう

イエス様はなぜ「向こう岸へ渡ろう」とされたのでしょうか。ガリラヤ湖の「向こう岸」は、「ゲラサ人の地」でした。そこは異邦人が住む「**デカポリス地方**」でした。5章を見ると、そこでイエス様はひとりの悪霊につかれた人と出会い、彼から悪霊を追い出されます。そして彼は、イエス様が「**自分にどれほど大きなことをしてくださったかを、デカポリス地方で言い広め**」ようになるのです。イエス様は、彼から悪霊を追い出すと、再び舟で湖を渡り戻って来られるのです。

イエス様が「向こう岸へ渡る」目的、それはひとりの人を救い、彼を通して異邦人の地方で福音を広めるためであったのです。イエス様はこの目的のために、夕方から弟子たちと一緒にガリラヤ湖を渡ろうとされたのです。

弟子たちのうち、ペテロとアンデレ、ヤコブとヨハネはガリラヤ湖の漁師でした。ですから弟子たちにとって、ガリラヤ湖で舟を漕ぐのは慣れたことだったでしょう。この日は夕方から舟を漕ぎましたが、彼らは夜のガリラヤ湖でこれまで何度も漁をしていましたから、イエス様の「向こう岸へ渡ろう」という言葉にも素直に従い、夕方から舟を漕ぎ出したのです。

### 2. 激しい突風の中で

しかし真っ暗闇の夜のガリラヤ湖で、突然、「**激しい突風**」が起こったのです。ガリラヤ湖は、周りを山で囲まれているので、山から吹き下ろしてくる風によって、時折、「激しい突

風」が起こったそうです。舟が出た夕方には予想できなかったのでしょう。激しい突風で、湖は荒れて、波が高くなりました。そして舟は波をかぶり、舟の中はあっという間に水でいっぱいになってしまったのです。弟子たちは、舟を操ることにに関してはプロですから、あらゆる対処をしたでしょう。帆を調整したり、オールを必死に漕いだり、舟の水をかき出した。しかし彼らの経験や技術も、自然の猛威の前には無力で、舟はついに沈みそうになってしまうのです。

イエス様が「向こう岸へ渡ろう」と言われたので、弟子たちはそれに従い、舟を漕ぎ出したのです。しかし彼らは、予想もしていなかった激しい突風に遭って、いのちの危険に晒されるのです。彼らは思ったでしょう。「イエス様なぜですか？イエス様あなたに従って舟を漕ぎ出して来たのに、なぜこのような目に遭わなければならないのですか？」

船旅における激しい突風で思い出すのは、旧約聖書の「ヨナ書」の出来事です。ヨナは、神様から二ネベに行きなさいと命じられましたけれども、その命令に従わず、二ネベとは他反対に向かう船に乗り込みました。すると、その船に激しい暴風が吹いて、船は沈みそうになるのです。しかしその暴風は、ヨナを船から海に投げ込むと止んだのです。この暴風は、神様の怒りであったのです。

しかし、弟子たちの激しい突風はどうでしょうか。弟子たちは、イエス様が「向こう岸へ渡ろう」と言われたので、それに従い、舟を漕ぎ出したのです。しかし、それでも彼らは、激しい突風に遭い、舟は沈みそうになり、いのちの危険に晒されたのです。

私たちは、ここから教えられることは、イエス様に従う者も嵐を経験するということです。イエス様は、向こう岸の異邦人の地で、ひとりの人を救い、その地方に福音を広めようと考えられました。その旅路で嵐を経験するのです。舟は沈みそうになり、いのちの危険に晒されるのです。嵐は、イエス様に従う者にも襲ってくるのです。

では、この嵐の中で、イエス様はどうしていたのでしょうか。帆を調整しろ、オールを必死に漕げ、水をかき出せとリーダーシップをとって、弟子たちを指示したのでしょうか。そうではありません。38節にはこうあります。「**ところがイエスは、船尾で枕をして眠っておられた。弟子たちはイエスを起こして、『先生。私たちが死んでも、かまわないのですか』と言った。**

イエス様は眠っておられたのです。私たちがもう一つ教えられることは、イエス様に従う者が嵐を経験する時、イエス様が眠っておられるということもあり得るということです。嵐の中で、イエス様が何も指示してくれない、導きを与えてくれない、沈黙しておられるということがあり得るということです。そして、イエス様に従う者が弟子たちのように、「イエス様。私たちが死んでも、かまわないのですか」「私たちがどうなっても何とも思わないのですか」と言いたくなるようなことが起こり得るということです。

イエス様に従っていれば、嵐に遭わない、イエス様はいつも語りかけ、導きを与えてくれるというのではないのです。イエス様に従っていても、嵐に遭い、いのちの危険に晒され、しかもイエス様が沈黙しておられるということがあり得るのです。

### 3. 風や湖を従わせる

ではイエス様は、舟が沈みそうになり、いのちの危険に晒されている弟子たちを、放っておかれるのでしょうか。そうではありません。39節を見ると、「**イエスは起き上がって風を叱りつけ、湖に『黙れ、静まれ』と言われた。すると風はやみ、すっかり凪になった**」とあります。

イエス様は、みことばをもって風や湖を静められました。41節で弟子たちは、「**風や湖までが言うことを聞くとは、いったいこの方はどなたなのだろうか**」と言いました。イエス様は、自然をも従わせられる方であることを示されました。旧約聖書では、神様が海を鎮める方であると描かれています。中でも出エジプトの時、モーセを通して海を分けて、イスラエルの民が海を渡った出来事は、神様こそ海を従わせる方であることが最も鮮やかに示された出来事でした。イエス様は、嵐を静めることを通して、御自身こそ旧約聖書で描かれた神御自身であること、天地万物を造られ、自然を支配する神御自身であることを示されたのです。

弟子たちはこれまで、イエス様が人々から悪霊を追い出し、病人を癒やし、罪を赦す出来事を見てきました。しかしそれらは皆、人に関わることでした。しかし今回は、自然に関わる出来事でした。風や湖を従わせ、自然をも従わせられたのです。そこで弟子たちは、「いったいこの方はどなたなのだろうか」と思うず口にするのです。弟子たちは、目の前にいるイエス様が、自分たちが思っている以上に大きな方であることを思い知らされるのです。

イエス様は、風や湖を叱りつけ、「黙れ、静まれ」と言われました。イエス様が叱り、「黙れ」と言われる時は、悪霊に対する時です。ですからここで風や湖の嵐は、悪霊との共通点があります。その意味で、イエス様に従う者が経験する嵐は、悪霊による誘惑とも取れるのではないかと思います。旧約聖書に登場してくるヨブも、神様に従う人でした。しかしサタンが彼に目をつけて、彼から財産と家族を奪い、健康も妻の信仰も奪っていきました。そして神様もそれを許され、沈黙されるということがありました。

イエス様に従う者も嵐を経験します。そして悪霊に誘惑されます。時には、健康を失い、家族に問題が起き、仕事に失敗し、人間関係がもつれ、経済的に困窮し、愛する者を失う時もあるかもしれません。その中で、いくら祈ってもイエス様が沈黙され、「イエス様、私がどうなってもかまわないのですか」と言いたくなるような時もあるかもしれません。私たちの舟が沈んで、もう駄目かもしれないと思う時もあるかもしれません。

### 4. 激しい突風の中での信仰

では、私たちはそのような時、どうすればよいのでしょうか。イエス様は、40節で弟子たちにこう言われます。「**どうして怖がるのですか。まだ信仰がないのですか**」。イエス様は弟子たちに、嵐の中で「信仰」を求められました。嵐の中では、「信仰」が求められるのです。

では弟子たちには、どのような信仰が必要だったのでしょうか。それは、悪霊や自然をも従わせられる神御自身が、この舟の中に共におられるから、何があっても大丈夫だと信じる信仰ではないでしょうか。

イエス様は、嵐の中で眠っておられました。あの姿こそ、私たちのあるべき姿なのかもし

れません。イエス様は嵐を恐れませんでした。神様を信頼していましたが、御自身の力を信じていたからでしょう。イエス様の眠っている姿にこそ、「信仰に生きる」人の姿があるのではないのでしょうか。詩篇 3：5 には、こうあります。「**私は身を横たえて眠り、また目を覚ます。主が私を支えてくださるから**」。また詩篇 4：8 にも、こうあります。「**平安のうちに私は身を横たえ、すぐ眠りにつきます。主よ、ただあなただけが、安らかに、私を住まわせてくださいます**」。

よく眠れる時というのは、安心して眠る時です。私たちは、不安な時、心配事がある時は、よく眠れません。私たちは、「主が支えてくださるから」と信じる時に、安らかに眠ることができるのです。嵐の中で眠っているイエス様の姿こそ、嵐の中での私たちのあるべき姿ではないのでしょうか。「主が支えてくださるから大丈夫」「主が共にいてくださるから大丈夫」、そう信じて安らかに眠る、それこそ嵐の中での私たちのあるべき姿ではないのでしょうか。

私たちの心は、嵐の時、騒いでしまいます。次から次へと不安になり、心配してしまいます。そして解決を急ぐあまり、よく考えもしないで行動して、事態を悪化させてしまいます。ある人は、イエス様が「黙れ、静まれ」と言われたのは、風や湖に対してだけでなく、弟子たちにも言われたのではないかと考えます。嵐の時は、私たちの心も荒れ狂い、騒いでしまいます。私たちも嵐の中で、祈りの声を上げることを止めてはなりません。しかし心は騒がせず、「信仰」に立つべきです。イエス様も言われました。「**あなたがたは心を騒がせてはなりません。神を信じ、また私を信じなさい**」(ヨハネ 14:1)。私たちは、嵐の中で、祈りつつ、悪霊も自然をも従わせられる神御自身であるイエス様が共にいてくださることを堅く信じて、安らかに眠りにつくことがもとめられているのではないのでしょうか。イエス様は、私たちの舟の中にも共にいてくださいます。私たちの家庭の中に、職場の中に、教会の中に共にいてくださいます。力ある言葉によって、いとも簡単に嵐を静めることができる方が、共にいてくださるのです。

## **おわりに**

弟子たちは、嵐を静めるイエス様を前に、「風や湖までが言うことを聞くとはい、いったいこの方はどなたなのだろうか」と言いました。イエス様の前には、悪霊も自然も従わざるを得ません。イエス様は、全世界を従わせる天地万物の造り主であり、私たちの贖い主、救い主です。そうであるならば、私たちも当然、イエス様に従わなければなりません。

しかし私たちの心は、あまりにも頑なです。私たちは、嵐によって、イエス様がどなたかを知っていくのかもしれない。人生の嵐は、私たちにとって決して喜ばしいものではありません。しかし嵐を通して、イエス様の力を経験し、イエス様に従うことにおいて成長していくのかもしれない。

この説教を準備している時に、幼い時に母から覚えさせられた暗唱聖句を思い出しました。特別に不安が強く、心配性の子もだった私にこの御言葉を選んで覚えさせてくれたのでしょうか。「**恐れるな。わたしはあなたとともにいる。たじろぐな。わたしがあなたの神だから。わたしはあなたを強くし、あなたを助け、わたしの義の右の手で、あなたを守る**」(イザヤ 41:10)。

天におられる私たちの父なる神様。

あなたが遣わされた御子イエス・キリストは、悪霊を追い出し、病を癒し、罪を赦し、自然をも従わせる方です。御子イエス様は、あなたに従う者と共におられます。たとえ私たちが嵐の中を通る時も、私たちが沈みそうになる時も、いのちの危険に晒される時も、あなたは共におられます。どうか私たちは、どんな嵐の中でも、心を騒がせることなく、あなたが共にいてくださることを堅く信じて、安らかに眠ることができますように。

そして嵐を通して、さらにあなたを知り、あなたに従う者とさせてください。

この祈りを私たちの救い主イエス・キリストの御名によってお祈ります。アーメン。